委託事業実施内容報告書
令和2年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム（B）】

実施内容報告書

団体名：学校法人学習院

1. 事業の概要

事業名称	社会の一員として日本語を学べる環境作り―共生社会における地域と大学の連携―
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	豊島区は、若干の増減があるとはいえ、区民の約1割が外国人という状況が続いている。彼らの視点で日本語学習環境を見直すと、日本語教室の開講曜日・時間・場所は限定的であり、義務教育修了段階の子どもや高齢者が学べる機会も限られている。その一方で、我々は、彼らが実際のところ、どの程度の日本語能力を持ち、どのような日本語学習を必要としているのかに関する情報を有してはいなかった。生活のための日本語を学びたい外国人が社会の一員として日本語を学べる環境作り、体制作りを推進する上で、在住外国人の実態を把握すること、具体的な対策につながる実践を行うこと、関係者ネットワークの強化が必要であった。
事業の目的	外国籍住民が、社会（コミュニティ）の一員として日本語を学び、日本語能力の高低に関係なく日本語を用いることのできる環境を作ることは、外国人が人口の1割を超える存在となっている豊島区が、共生途上の段階から共生社会となるために、さらには、消滅可能性都市（日本創生会議、2014）を脱却するために、優先すべき課題の一つである。現在の豊島区はいわゆる生活者とされる大人が日本語を学べる場も、子どもが日本語学習支援を受けられる機会も十分ではなく、外国籍住民の「ライフ（人生、生活の両義）」の視点から見れば、学習機会を切れ目なく提供できているとは言えない。また、豊島区は新成人の4割が外国人であるが、彼らが学校やアルバイト先以外の場で、社会の一員として活躍する場は限られ、彼らにとって豊島区が一時的な滞在先としか捉えられていない可能性も否定できない。本事業では、2019年度に築いたネットワーク「日本語ネットとしま」において、この現状について問題提起をし、域内において漏れのない支援体制、日本語学習支援体制を築いていくための議論を進めつつ、「日本語ネットとしま」の活動として、在住外国人を対象としたアンケート調査を行い、彼らの日本語能力や日本語使用の実態と課題を明らかにする。並行して、日本語ができるようになってから日本社会に参入するという発想ではなく、外国人が最初から社会の中で日本語を試しながら日本語能力を向上させていくことをねらった日本語教育、そして、日本語母語話者らがそういった外国人とのコミュニケーションを円滑に行うための能力を持つことを目的とした研修を実施する。本事業を実施することにより、域内における課題の明確化とその解決策の具体化が進むと考える。
本事業の対象とする空白地域の状況	該当しない
事業内容の概要	本事業では大きく4つの取組を通じて、上記課題の解決を目指した。 1. 区内日本語教育連携体制の構築から強化へ：（1）2019年度に、豊島区日本語教育ネットワーク会議体として発足した「日本語ネットとしま」と豊島区の協力の下、区内在住外国人を対象としたアンケート調査を実施した。課題抽出のため、データの集計・分析を行った。（2）「日本語ネットとしま」の会議を開催し、情報共有、課題及びその解決策に関する意見交換をした。 2. コミュニティを基盤とする自律的・協働的な日本語学習・使用の促進：消防署と連携し、生活に必要な日本語を学ぶ場、日本語能力を向上させつつ日本社会について学ぶ場、相互理解の場を作った。ICT等、多様なリソースを活用しつつ、コミュニティの中で社会の一員として自律的・協働的に学び続け、日本語を使用するための能力を培った。 3. シンポジウム『「豊かな日本語使用」を考える』の開催：「日本語ネットとしま」の活動報告、上記調査の結果報告、日本語教育及び人材育成のための研修についての報告、専門家による講演、参加者間の意見交換を行った。 4. 人材の育成：熟達した日本語使用者（いわゆる日本語母語話者や上級レベル日本語学習者）を対象に、発話調整、傾聴、異文化間コミュニケーションについて学ぶ機会、実践及び振り返りの機会を提供した。
事業の実施期間	令和2年5月～令和3年3月　（11か月間）

2. 事業の実施体制

（1）運営委員会

【運営委員】

1	金田智子	学習院大学文学部 教授
2	杜長俊	学習院大学国際センター 准教授
3	中上亜樹	学習院大学文学部 准教授
4	水上千春	豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ 係長
5	千秋麻帆	豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学グループ 職員
6	吉田聖子	川崎市国際交流協会 評議員、人材育成コーディネーター
7	米勢治子	東海日本語ネットワーク 副代表
8	文野峯子	人間環境大学 名誉教授
9	品田潤子	公益社団法人国際日本語普及協会＜AJALT＞ 教師会員
10	阿部治子	豊島区政策経営部企画課多文化共生担当係長

＜第3回運営委員会（3月6日）＞

【概要】

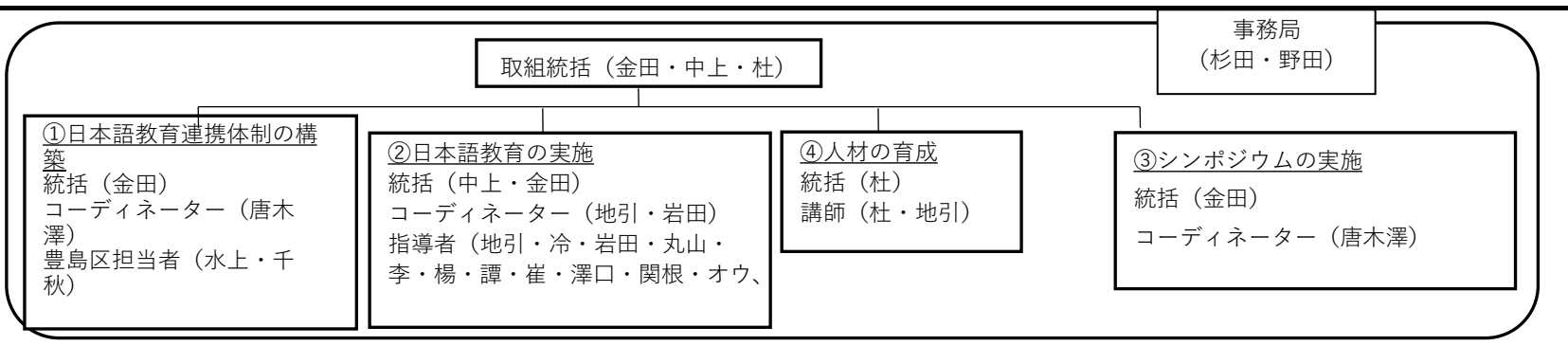
回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	令和2年9月1日(火) 10:00～12:30	2.5時間	学習院大学国際センター会議室及びオンライン(Zoom)	千秋麻帆、澤田健司(豊島区政策経営部企画課多文化共生グループ)、阿部治子、品田潤子、文野峯子、吉田聖子、米勢治子、金田智子、中上亜紀、杜長俊、唐木澤みどり、地引愛、野田佳代、大泉佳菜	1. 委員及び出席者紹介 2. 2019年度事業についての報告・成果について 3. 2020年度事業計画及び準備状況と今後の検討 4. 今後の予定について
2	令和3年1月16日 (金) 13:00～15:30	2.5時間	学習院大学国際センター会議室及びオンライン(Zoom)	千秋麻帆、阿部治子、品田潤子、文野峯子、吉田聖子、米勢治子、金田智子、中上亜紀、杜長俊、唐木澤みどり、地引愛、岩田香里、野田佳代、大泉佳菜	1. 2020 年度事業の経過報告 (1)取組1:ネットワーク会議「日本語ネットとしま」活動報告 (2)「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」経過報告 (3)取組2日本語教室の実施　活動報告 (4)取組4人材育成　経過報告 2. 取組3(シンポジウム)についての検討
3	令和3年3月6日(土) 会議　10:30～12:30 (ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ13:30～17:00)	2時間 (＋ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ3.5時間)	学習院大学西5号館301及びオンライン(Zoom)	水上千春、千秋麻帆、阿部治子、品田潤子、吉田聖子、米勢治子、金田智子、中上亜紀、杜長俊、唐木澤みどり、岩田香里、野田佳代、大泉佳菜	＜会議＞ 1. 2020 年度事業の経過報告 (1)取組1:ネットワーク会議「日本語ネットとしま」活動報告 (2)「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」速報版に関する報告 (3)取組2日本語教室の実施　活動報告 (4)取組4人材育成　経過報告 2. 取組3(シンポジウム)について 3. 来年度に向けての検討 ＜シンポジウム＞ ・参加の上、事業評価

(2)地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	2019年に、学習院大学を拠点として、豊島区の文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ及び政策経営部企画課多文化共生グループとの協働により、区内日本語教育機関のネットワークである「日本語ネットとしま」が発足し、豊島区教育センター、区内日本語教室、国際交流団体、日本語学校、大学、学習支援団体等が一堂に会し、情報交換をする機会を区内で持つことが可能となった。年3回の会議を開催し、情報交換・意見交換を行う体制が整った。「日本語ネットとしま」の協力により、2019年度は日本語教育機関・組織に対する調査を、2020年度は在住外国人を対象とした調査を実施した。2019年度調査をもとに「豊島区日本語学習環境マップ」を作成し、ネットワークを通じた普及を進めている。日本語教育の実施においては、消防署と協働した活動が恒例となっており、2020年度もオンラインで実施した。

(3)中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制



3. 各取組の報告

＜取組1＞【実施期間:令和　2年　5月　11日～令和　3年　3月　19日】			
取組の名称	区内日本語教育連携体制の構築から強化へ		
取組の目標	1. 多様な外国籍住民が地域社会の一員として日本語を学び、用いることのできる学習環境の整備を目指し、区内在住外国人を対象とした調査を実施し、日本語能力、日本語学習及び使用の状況等を明らかにする。 2. 調査結果から、環境整備に向けた課題の抽出を行い、「日本語ネットとしま」会議において課題解決のための方策を検討する。 3. ネットワーク会議「日本語ネットとしま」を開催し、区内日本語教育に関する情報共有、体制整備に向けた意見交換を行う。		
取組の内容	1. 外国籍住民を対象とした調査の実施:文化庁「日本語教育に関する調査の共通利用項目」を用い、豊島区との協働で、区内在住外国籍区民の日本語能力、日本語学習状況、日本語使用状況及び情報交流に関する実態を把握するための調査「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」をウェブアンケートで行った。調査結果の速報版を作成し、取組3のシンポジウムで公開・報告を行った。速報版は7言語に翻訳し、3月中に学習院大学と豊島区のHPで公開予定。 2.「日本語ネットとしま」会議を3回開催し、豊島区の担当課、区内の日本語教育関係者(日本語教室、日本語学校、大学、区教育センター、小学校、学習支援団体等)、外国籍住民等が集まり、豊島区及び各団体の情報共有・意見交換、特に、感染症拡大により抱えることとなった困難及びその解決方法についての情報交換を行った。上記調査の経過報告をし、意見交換すると同時に、調査協力依頼を行った。調査結果から明らかとなった課題についての検討は2021年度に行う。 3. 2019年度作成の「日本語学習環境マップ」を普及するため、日本語ネットとしま参加者を通じた配布、シンポジウムでの紹介・配布を行った。改訂と追加翻訳は次年度の課題とした。 4. 上記1～3を通じて、地域の日本語教育関係者の連携体制を強化した。		
□ 空白地域を含む場合，空白地域での活動	該当しない		
取組による体制整備	多様な団体・組織で構成する「日本語ネットとしま」を基盤として、豊島区と学習院大学との協働で外国籍住民を対象とした調査を行った。準備段階から「日本語ネットとしま」で報告を行い、調査の意義を伝えると同時に、調査への協力を依頼した。また、3回の会議において、共通の課題となった「コロナ禍でいかに活動を続けるか」について、悩みの共有、具体的な工夫・解決策の紹介を行った。これらを通じ、区内日本語教育体制の環境整備に向け、組織・機関の関係づくりが進んだ。		
取組による日本語能力の向上	本取組において、日本語能力の向上に関する直接的な効果は目的としない。		
参加対象者	区内日本語教育関係機関・組織及び在住外国人等コミュニティの中心的立場の方々	参加者数 (内 外国人数)	36人(4人)
広報及び募集方法	案内文作成・配布・送付。豊島区HP、大学HPによる周知。		
開催時間数	総時間　6時間(空白地域　　時間)	内訳　　2時間　×　3回	
主な連携・協働先	豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ、豊島区政策経営部企画課多文化共生推進グループ、豊島区教育センター、豊島区民社会福祉協議会、区内日本語教室、外国人支援を行うNPO等		

受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	計
	2				1					32	35
※該当する場合のみ	ミャンマー　1										

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和2年7月6日(月) 14:30～16:30	2	豊島区庁舎 会議室 807.808	21	豊島区及び各団体の状況の共有、 外国にルーツを持つ区民の話	・豊島区及び各団体の今年度の状況 ・外国にルーツを持つ区民の話 ・昨年度調査の報告 ・今後の予定、 質疑応答	＜話題提供＞ 段躍中(中国) マハルザン・ラビ(ネパール) チョウチョウソー(ミャンマー)	澤田健司・阿部治子・宰務千恵・水上千春・千秋麻帆・齊藤光司・野瀬博・山本莉子・瀬間弘子・慶世村ひろ子・林輝雄・地引愛・石平晃子・幅野裕敬・八坂祐子・香川陽子・段躍中・マハルザン・ラビ・チョウチョウソー・金田智子・唐木澤みどり
2	令和2年10月16日(金) 10:00～12:00	2	豊島区庁舎 会議室 807.808	22	今年度調査説明、 国民年金の話、 豊島区及び各団体の状況の共有	・区内在住外国人対象の調査の説明と協力依頼 ・国民年金の概要説明等(日本年金機構) ・今年度シンポジウム説明 ・豊島区及び各団体の現状報告、質疑応答	＜話題提供＞ 藤田充洋・池田優子(日本年金機構)	澤田健司・阿部治子・宰務千恵・千秋麻帆・野瀬博・大竹宏和・杉山貴子・堀富士夫・慶世村ひろ子・林輝雄・地引愛・中上亜樹・栗林知絵子・牧野斉子・王媛・香川陽子・マハルザン・ラビ・藤田充洋・池田優子・森　栄・金田智子・唐木澤みどり
3	令和3年2月2日(火) 10:00～12:00	2	オンライン (Zoom)	18	調査経過報告、 シンポジウム説明、 各団体の状況と課題共有・検討	・調査経過報告(報告書作成に向けて) ・シンポジウム説明と協力依頼、 ・各団体の状況と課題共有・検討	なし	阿部治子・宰務千恵・千秋麻帆・齊藤光司・野瀬博・石川悦子・田中慎吾・瀬間弘子・堀富士夫・地引愛・中上亜樹・中原清則・牧野斉子・丸山千歌・香川陽子・マハルザン・ラビ・金田智子・唐木澤みどり
計		6		61				

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

〇取組事例①

【「日本語ネットとしま」会議　第1回　令和2年7月6日】

1. 豊島区及び各団体の今年度の状況の共有：今年度最初の会議となるため、豊島区及び各団体が今年度の状況を報告し、共有した。
2. 外国にルーツを持つ区民の話：外国にルーツを持ち、同国人コミュニティの中心的存在として活躍されている区民3名の方に参加していただき、これまでの活動や豊島区への意見、会議の感想等を話してもらった。日本語学習の必要性を感じながら学習の余裕がない人たちの存在や外国人への情報提供の不足、外国人の活躍促進等貴重な意見は、今後の体制整備に生かせるものであった。
3. 昨年度調査の報告と、今年度調査の予定を説明した。
（写真：左）活動報告がなされる様子　（写真：右）外国籍住民の発言の様子

〇取組事例②

【「日本語ネットとしま」会議　第3回　令和3年2月2日】

緊急事態宣言発令中のため、対面とオンラインを併用して実施した。
（写真左：オンラインの様子、右：会議室参加の様子（オンライン画面最上段真ん中「モニター」 オンライン参加者にも見えるようにした。）
1. 調査経過報告：今年度の外国籍住民対象調査への協力のお礼と経過報告を行った。報告書作成に向けて、意見交換を行った。
2. シンポジウム説明と協力依頼：シンポジウムの予定を説明し、各団体の活動紹介（今年度の状況と工夫の共有）への協力を依頼した。
3. 各団体の状況と課題共有・検討：課題として、コロナ禍での学習の継続、そのためのオンライン支援、支援者間の情報の共有、外国人支援、外国人への情報提供等があげられ、意見交換を行った。

（2） 目標の達成状況・成果

・新型コロナウイルスの感染拡大により、ネットワーク会議「日本語ネットとしま」の開催が危ぶまれたが、当初の計画通り、計3回開催し、区内日本語教育に関する情報共有、体制整備に向けた意見交換を行うことができた。感染症対策のため、大学の教室使用が難しく、第1、2回は豊島区に区庁舎内会議室をご用意いただいた。これにより、対面での開催が可能となっただけでなく、豊島区関係者の集まりである、という意識を高めることにつながった。第3回は緊急事態宣言によりオンライン開催としたが、オンライン参加が難しい方のために大学会議室を用意し、参加しやすい工夫をした。毎回20人前後の参加者を確保することができた。
・「日本語ネットとしま」では、区内で活躍されている外国につながる区民の方に参加していただくことで、当事者の視点からお話を伺い、意見交換をすることができた。会を重ねるごとに、情報提供が進み、意見交換も活発に行われるようになった。特にコロナ禍でどのように支援を継続するかという点で、参加者は同じ悩みを抱えており、シンポジウムでの活動報告につながる議論ができた。また、第2回会議で日本年金機構の方の申し出により、外国人住民への国民年金の手続等の説明が行われた。これは、外国人住民への情報提供が可能な場として、本会議が認知されつつあることを示していると考えられる。
・「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」を、豊島区との共同調査として行うことができた。「日本語教育に関する調査の共通利用項目」（文化審議会国語分科会）の質問項目を活用し、区の要望により、区内の多文化共生推進につながる質問項目を追加した。調査対象者の負担軽減、高い回収率をねらい、ウェブアンケートを用いると同時に、区内在住外国人国籍別内訳を参考に、日本語、やさしい日本語、英語、韓国語、中国語＜簡体字、繁体字＞、ベトナム語、ネパール語、ミャンマー語によるものを用意した。有効回答1,179件を集計・分析し、日本語能力、日本語学習及び使用の状況を明らかにすることができた。調査結果の速報版を作成し、取組3のシンポジウムで公開・報告を行うことにより、豊島区及び近隣の関心のある方に広く伝えることができた。速報版は複数言語に翻訳し、豊島区及び学習院大学のHPで公開予定である。
・「日本語ネットとしま」会議での情報交換・意見交換を通じ、環境整備に向けた課題を検討することができた。

（3） 今後の改善点について

・ネットワーク会議「日本語ネットとしま」は計画通り、計3回行うことができたが、豊島区や各団体の状況、情報共有、課題解決のための意見交換は、より密に行うことが必要であり、会議の意見交換の中でも課題として挙げられた。会議以外の機会、また対面以外の多様な情報共有・意見交換の場を考えていく必要がある。
・「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」は調査結果の速報版を公開し、調査協力者らへの結果報告を遅滞なく行うことができた。しかし、最終報告までにはさらに時間を要するため、来年度半ばまでを目途に分析結果をまとめ、それをもとに、課題の抽出、解決方法の検討を進める計画である。
・「日本語ネットとしま」はこれまで学習院大学が事務局となり運営してきたが、より自律的・協働的なネットワークとなるために、運営方法に関する検討が急がれる。

＜取組2：教室A（わくわくクラス）＞ 【実施期間：令和2年5月30日～令和3年2月13日】

取組の名称	コミュニティを基盤とする自律的・協働的な日本語学習・使用の促進–「学習院大学わくわくとしま日本語教室」–＜教室A：わくわくクラス＞
取組の目標	1. 基礎的な日本語能力を持たない外国籍住民が、社会の一員として生活するために必要となる日本語の基礎を身に付け、日常生活の中で日本語を使えるようになる。 2. 外国籍住民が公的機関、各種サークル等との活動を通じ、コミュニティの中で自律的・協働的に学び続けるための能力を培い、催し等に主体的に参加するようになる。 3. 日本語及び日本社会について理解を深め、参加者それぞれがコミュニケーション能力を向上する。
取組の内容	教室A（わくわくクラス）では、以下を行った。 1. 日本語能力の育成：これまでに「学習院大学わくわくとしま日本語教室」で開発した教材を基礎として、多様な背景、ニーズ、生活環境に配慮した活動や教材を設計し実施した。 2. 学ぶ力の育成：2016年度から3年間実施したブラッシュアップ講座（教育人材育成のための研修）での学びを生かし、学習者が自身の日本語学習や日本語使用を自律的に管理することを促すため、評価システムや本教室作成のポートフォリオを活用した。学びを促す各種リソース、文化庁や国際交流基金が開発したICT教材やe-learningシステム、スマホ等機材も積極的に活用した。 3. コミュニティの中での学び：感染症拡大によりオンライン形式で授業を行うこととなったため、当初予定していた「対面のやりとりの重要性を感じる活動」は10月24日の1回に留まった。公共施設を用いて学習者同士がやりとりをすることにより、社会の一員であることを意識できる活動が実施できた。また、オンライン授業においてもZoomを介して他者とつながる活動を行った。 4. 双方のコミュニケーション能力向上：当初予定していた各種団体・サークル、当大学各学科学生、他大学学生などとの活動を実施することは叶わなかった。しかし、消防署との連携授業により外国籍住民と日本人がいずれも主体となる活動を実施した。
□ 空白地域を含む場合，空白地域での活動	該当しない
取組による体制整備	感染症拡大により、当初予定していた対面の連携授業を行うことが困難であったが、コースの終盤に消防署の協力のもとオンラインで連携授業を行った。出身国・母語が異なる人々と言葉や文化の違いを越えた関わりを通じ、相互理解が見られた。遠隔でも繋がることができる可能性を模索し、対面のみならずオンラインにおける連携体制も視野に入れたい。
取組による日本語能力の向上	1. 日本語でできるやりとりは簡単な挨拶のみであった学習者が、買い物など日常生活で遭遇する頻度の高い場面や、病院など緊急性の高い場面において簡単なやりとりができる日本語能力を身につけることができた。また、継続的に教室に通っていた学習者は、「とよた日本語能力判定」において、レベル0からレベル1、またはレベル1からレベル2へ向上した。 2. 教室外で学んだことを共有する時間を授業内で設けているが、講師対学習者のみならず、学習者同士でアドバイスする様子が見られた。さらに、そのアドバイスを受けて学習方法が変容する学習者も多数見受けられ、教室内で自律的・協働的に学習することができたと考える。このことは、日本語能力向上の一助となったといえよう。
参加対象者	・豊島区及び近隣区域に暮らす外国人（特に、これまで学習の機会がなく日本語を学んだことがない人） ・＜特別授業＞専門職の日本人
参加者数（内 外国人数）	29人（ 26人） ＜協力者(ゲスト等)2人＞
広報及び募集方法	チラシ作成。豊島区HP、大学HP及びSNSによる周知。
開催時間数	総時間 80 時間（空白地域0時間）　内訳 1回 2.5時間 × 32 回
主な連携・協働先	消防署、雑司ヶ谷地域文化創造センター

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	計
	12	1		1					2	1	17
※該当する場合のみ	イエメン（3人）、アメリカ（2人）、モンゴル（2人）、イタリア（1人）、カナダ（1人）、ミャンマー（1人）										

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和2年5月30日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	Zoom 操作の練習	授業開講に伴い、オンライン授業で使用するZoomの操作方法を練習した。グループに分かれ、段階的に指導した。	冷俊俊 李娜 譚穎楠 関根千紘 岩田香里	—
2	令和2年6月6日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	近所の人との会話 ① あいさつ	①自律的、継続的な日本語学習を行うために、学習ポートフォリオを使用し、中・短期の目標を設定した。 ②近所の人と簡単なあいさつができることを目標に、時間に合わせた挨拶表現を練習し、学習者同士で、ロールプレイを行った。	冷俊俊	李娜 譚穎楠
3	令和2年6月13日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	オンラインにおける会話① 日常	オンライン授業においてほかの学習者と雑談することを目標に、日常のことを質問したり、それに対して答えたりする表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。	【前半】 関根千紘 【後半】 冷俊俊	【前半】 冷俊俊（指導補助） 【後半】 関根千紘（指導補助）

4	令和2年6月20日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	11	買い物① （対面で）	コンビニやスーパーなどで対面で買い物ができることを目標に、商品の数え方などの表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。	【前半】 李娜 【後半】 岩田香里	【前半】 岩田香里（指導補助） 【後半】 李娜（指導補助）
5	令和2年6月27日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	13	ドラッグストア	ドラッグストアで薬剤師に症状を簡単に説明し、薬を購入できることを目標に、症状の言い方などを練習し、学習者同士でロールプレイを行った。	関根千紘	李娜（指導補助） 譚穎楠（指導補助）
6	令和2年7月4日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	13	郵便局	国内で小包を送る際の荷物到着日程の確認、予算内での郵送方法の選択など、郵便局員とのやり取りを練習し、ロールプレイを行った。 【読み書き】自分の名前をPCなどを用いてカタカナで打てることを目標に、50音表から自分の名前の文字を探し、打ち込む活動を行った。	冷俊俊	李娜（指導補助） 譚穎楠（指導補助）
7	令和2年7月11日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	ごみ	ごみ分別表が読み取れることを目標に、曜日の漢字を読む練習やごみの種類がわからない時に聞く表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。 【読み書き】ドラッグストアにある商品表示が読めることを目標に、50音表からひらがなを探し、読む活動を行った。	【前半】 李娜 【後半】 岩田香里	【前半】 関根千紘（指導補助） 【後半】 李娜（指導補助）
8	令和2年7月18日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	病院① （初診）	初診受付と診察時の医師とのやりとりができることを目標に、初診であることを伝える表現、症状を表す表現を練習した。 【読み書き】メニューにある濁音・半濁音を含む料理名を発音できることを目標に、50音表を使いながら、メニューの音読を行った。	譚穎楠	冷俊俊（指導補助） 李娜（指導補助）
9	令和2年7月25日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	11	病院② （診察）	診察でのやりとりができることを目標に、症状の表現や医師からの指示表現を聞いてわかる練習をし、教師とロールプレイを行った。 【読み書き】長音を含む駅名などを見て音声化できることを目標に、音読を行った。	【前半】 李娜 【後半】 譚穎楠	【前半】 譚穎楠（指導補助） 【後半】 李娜（指導補助）
10	令和2年8月1日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	7	地震・火災① （避難指示）	避難時に適切な行動をとれることを目標に、よく使われる表現を聞きとる練習を行い、簡易的な避難訓練を行った。	岩田香里	関根千紘（指導補助）
11	令和2年8月8日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	7	地震・火災② （防災グッズの購入）	①自律的、継続的な日本語学習を行うために設定した中・短期目標の達成度を自己評価した。 ②防災グッズを購入できることを目標に、グループで非常用持ち出し袋に入れるものを考え、相談した。	岩田香里	譚穎楠（指導補助）
12	令和2年8月22日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	近所の人との会話② スーパーなどで会ったときのあいさつ	①自律的、継続的な日本語学習を行うために第1セッションの目標を振り返り、新たに中・短期目標を設定した。 ②スーパーや病院などで偶然知り合いに会ったときにあいさつと簡単な会話ができることを目標に、あいさつや気遣いのひとことなどの表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。	冷俊俊	岩田香里（指導補助）
13	令和2年8月29日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	6	道聞き （建物内で）	売り場やトイレ等施設の場所がわかることを目標に、階数や方向を示す表現の聞きとり練習をした。	関根千紘	冷俊俊（指導補助）
14	令和2年9月5日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	6	電車	下車駅で目的地に近い出口や改札口の場所がわかることを目標に、駅構内の看板の漢字の読み取りを練習した。	岩田香里	関根千紘（指導補助）

15	令和2年9月12日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	5	タクシー	運転手に行先(自宅)を伝えることを目標に、目印や方向を示す表現の練習をし、ロールプレイを行った。	【前半】 関根千紘 【後半】 リュウウテイ	【前半】 リュウウテイ(指導補助) 【後半】 関根千紘(指導補助)
16	令和2年9月19日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	5	交番 (忘れ物センター)	交番や忘れ物センターで紛失物と紛失状況について簡単に説明できることを目標に、なくした財布の色や形、特徴に関する表現を練習し、教師とロールプレイを行った。 【読み書き】メニューや駅名などにある促音・拗音が含まれる言葉を見て音声化できることを目標に、音読を行った。	冷俊俊	リュウウテイ(指導補助) 王菲(指導補助)
17	令和2年9月26日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	7	予約	電話で美容院・理髪店の予約ができることを目標に、希望する日にちや時間、カット・カラーなどのメニューを言う練習をし、教師とロールプレイを行った。 【読み書き】スマートフォンで簡単な言葉を入力できることを目標に、フリック入力を練習した。	【前半】 張藝韋 【後半】 岩田香里	【前半】 リュウ ウテイ(指導補助) 【後半】 張藝韋(指導補助)
18	令和2年10月3日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	6	レストラン① (入店)	レストランで店員と入店時のやりとりができることを目標に、人数の言い方や待ち時間を尋ねる表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。 【読み書き】行きたいレストラン、美容院などに入ることを目標に、開店時間や定休日など店頭にある看板を読む練習をした。	【前半】 王菲 【後半】 岩田香里	【前半】 冷俊俊(指導補助) 【後半】 王菲(指導補助)
19	令和2年10月10日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	6	レストラン② (注文・会計)	料理を選んで注文することができることを目標に、料理名がわからない際の注文表現や会計を依頼する表現を練習し、学習者同士でロールプレイを行った。 【読み書き】様々なレストランのメニューを読み取り、食べたいものを注文するタスク活動を行った。	【前半】 リュウウテイ 【後半】 冷俊俊	【前半】 冷俊俊(指導補助) 【後半】 リュウウテイ(指導補助)
20	令和2年10月17日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	5	消防車・救急車① (119番通報訓練)	119番に電話し、消防車及び救急車を呼べることを目標に、名前や住所、状況に関する質問に答える練習をし、教師とロールプレイを行った。 【読み書き】公民館などの公共の場で使用される感染対策に関する日本語を調べることを目標に、スマートフォンの辞書のアプリで日本語を入力する練習をした。	岩田香里	王菲(指導補助) リュウウテイ(指導補助)
21	令和2年10月24日(土) 10:00～12:30	2.5	雑司ヶ谷 地域文化創造センター	5	イベント、 コンサルテーションの実施	①防災グッズに対する理解を深めるために、防災グッズを手に取り、実際に使用方法を確認した。 ②買い物、レストランでの注文など、対面で行うものを中心にオンライン授業で学んだ既習事項のロールプレイを行った。 ③希望した学習者を対象に、日本語能力の自己評価、「とよた日本語能力判定」の対象者判定テストによる客観的な日本語能力評価を行った。その結果をもとに、コンサルテーションを行った。 ※参加者:学習者5名、一般参加者3名(内、子ども2名)	関根千紘 張藝韋	リュウウテイ(指導補助) 王菲(指導補助) 冷俊俊(通訳)
22	令和2年11月7日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	7	近所の人と話す② 出身	①自律的、継続的な日本語学習を行うために、これまでの学習の記録を振り返りながら、学習ポートフォリオを使用し、短期的な目標を新たに設定した。 ②相手の出身地を聞いて、それに関わる簡単なやり取りができることを目標に、学習者同士で相手の出身地の名所や名物を聞き合った。	冷俊俊	関根千紘(指導補助)

23	令和2年11月14日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	7	買い物② （花屋）	花屋が利用できることを目標に、色や購入目的に関する表現などを練習し、教師とロールプレイを行った。	【前半】 岩田香里 【後半】 リュウウテイ	【前半】 リュウウテイ（指導補助） 【後半】 なし
24	令和2年11月21日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	7	買い物③ （試着）	服や靴が買えることを目標に、試着の依頼表現などを練習し、学習者同士でロールプレイを行った。	【前半】 王菲 【後半】 張藝韋	【前半】 張藝韋（指導補助） 【後半】 王菲（指導補助）
25	令和2年12月5日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	近所の人との会話④ （食事やイベントに誘う）	近所の人や職場の人を食事や催し物に誘うことを目標に、誘いや断りの表現を練習し、ロールプレイを行った。 【読み書き】メールで近所の人や職場の人を食事や催し物に誘うことを目標に、誘いや断りの表現の入力を練習し、教師へメールを送る活動を行った。	関根千紘	岩田香里（指導補助）
26	令和2年12月12日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	7	近所の人との会話⑤ （おすすめを尋ねる）	近所の人や職場の人と簡単な会話ができることを目標に、すすめられた観光地への行き方や所要時間を尋ねる表現を練習し、当日教室にいた見学者におすすめの観光地を尋ねる活動を行った。 【読み書き】食事などの約束の予定の変更をメールで依頼することを目標に、依頼や変更の理由の表現の入力を練習し、教師へメールを送る活動を行った。	冷俊俊	岩田香里（指導補助）
27	令和2年12月19日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	近所の人との会話⑤ （長期休暇の予定について）	相手との関係を考慮しつつ、休暇の予定について話せることを目標に、学習者同士で長期休暇の予定について聞き合う活動を行った。このやり取りをする上で重要となる、動詞の活用を練習した。 【読み書き】職場の人や友人に年賀メールを送ることを目標に、新年の挨拶の表現の入力を練習し、教師へメールを送る活動を行った。	【前半】 張藝韋 【後半】 リュウウテイ	王菲（指導補助）
28	令和3年1月9日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	6	近所の人との会話⑦ （お土産を渡す）	相手との関係を考慮して土産を渡せることを目標に、味や中身に関する表現を練習し、自文化で一般的なお土産の写真を見せながら、紹介する活動を行った。 【読み書き】申込書の形式に関わらず、生年月日が正しく記入できることを目標に、和暦の意味と漢字の形を知り、様々な申込書に生年月日を記入した。	【前半】 王菲 【後半】 関根千紘	張藝韋（指導補助）
29	令和3年1月16日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	消防車・救急車② （消防署連携授業）	119番に電話し、消防車及び救急車を呼べることを目標に、通報訓練用の電話を使用し、東京消防庁目白出張所の消防士と通報訓練を行った。	【前半】 王菲 【後半】 岩田香里	【前半】 関根千紘（指導補助） 【後半】 王菲（指導補助） 張藝韋（通訳）
30	令和3年1月23日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	6	オンラインにおける会話② 好きなこと・ものの紹介 イベント準備	翌週のイベントに向け、実物を見せながら、自分が好きなこと・もの（趣味・自文化の食べ物など）を簡単に説明することを目標に、いつ・どこなどの疑問詞をもとに詳細に説明したり、順序立てて説明したりする活動を行った。 【読み書き】名前、住所、生年月日など、申込書に必要な事柄を書く活動を行った。	【前半】 張藝韋 【後半】 岩田香里	関根千紘（指導補助）

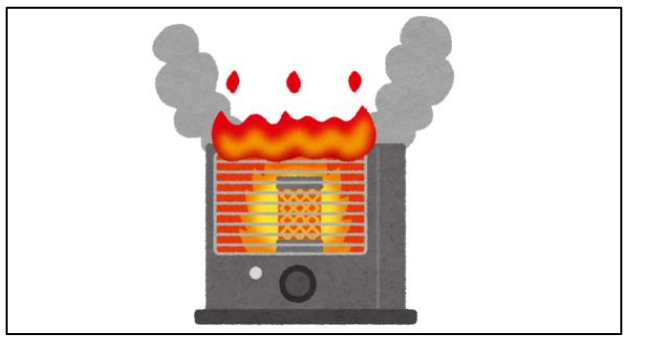
31	令和3年1月30日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	7	オンラインにおける会話③ 好きなこと・ものの紹介 (イベント)	実物を見せながら、自分が好きなこと・もの(趣味・自文化の食べ物など)を簡単に説明し、質問に答える文化紹介イベントを行った。	【前半】 リュウウテイ 【後半】 岩田香里	【前半】 王菲(指導補助) 【後半】 リュウウテイ(指導補助)
32	令和3年2月13日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン (Zoom)	4	コンサルテーションの実施	希望した学習者を対象に、日本語能力の自己評価、「とよた日本語能力判定」の対象者判定テストによる第三者評価を行った。 その結果を基に、これからの日本語学習や日本の生活について講師と話し合うコンサルテーションを行った。 ＊日本語能力判定は、2人1組で実施するのが望ましいと考え、指導者3人、指導補助4人で行った。 ＊「とよた日本語能力判定」の対象者判定テストは本来はコース開始段階に行うものだが、当クラスの学習者の到達状況を判定するものとして適当と考え、話す・聞くのみについて実施した。	冷俊俊 関根千紘 張藝韋	オウシショウ(通訳) 周茹倩(通訳) リュウウテイ(通訳) 王菲(通訳)
計		80		257				

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

〇取組事例①

【第29回　令和3年1月16日:連携授業(通報訓練実施)】
　消防署協力のもと、例年対面形式で行っているが、今年度は感染症拡大により対面実施が困難となった。しかし、消防署と本事業担当者の創意工夫により、オンライン(Zoom)での通報訓練が実現した。
　今年度は2クラス(教室A、B)の合同授業であったため、「通報の仕方」を学んでいない教室Bの学習者と、セッションの途中から参加し始めた学習者向けに教室Bの講師により事前教材が作成された。
　当日は学習者12名が消防士2名とやり取りを行い、学習者の達成度は比較的高かった。消防署にとってもコロナ禍における通報訓練の場、新人消防士の通報訓練の場を確保する機会となったとのことで、この授業は双方にとって意義のある授業であった。

(写真:左)通報訓練の様子
(写真:右)通報訓練で使用した教材



〇取組事例②

【第31回　令和3年1月30日:紹介イベント(実施)】
「社会の一員となることを意識できる活動」の一環として、学習者が自身の好きなもの・ことを紹介するイベントを行った。
このイベントは、これまで情報の受け手側であった学習者が趣味や伝えたいことを話すことによって自己開示をし、自ら情報を発信するという目的で実施した。参加した学習者(7名)が紹介した内容は、自文化の料理、スキー・ゴルフ・歌などの趣味、友人と販売している商品である。学習者の個性が溢れるイベントとなった。
最後には、一番よいと思った紹介を全員で投票した。

(写真)グループに分かれ、料理直前の練習をしている様子(右上画面内が練習をしている人)

(2) 目標の達成状況・成果

1. 日本語能力の育成
・各セッション終了後に行っているアンケートによると、継続的に通っていた学習者（10名）の10名が日本語が「上手になった」「まあまあ上手になった」と日本語能力の向上を感じていることがわかった。
・これまで、及びこれからの日本語学習や日本の生活について講師と話し合うコンサルテーションを第21回と第32回の計2回、希望者に対して行った。第21回の希望者は5名、第32回は4名であった。コンサルテーションの一環として、日本語能力の客観的評価を行うために、「とよた日本語能力判定」の「対象者判定テスト」を実施した。対象者判定は本来、コース開始時に実施するもので、未学習段階（レベル0）から要支援段階（レベル2）までの判定をすることができる。本クラスの学習者がレベル2に達しているか判定したかったため、「対象者判定テスト」を使用した。
　コース終了後の第32回では、希望者のうち継続的に通っていた4名のうち3名が、「聞く」能力、「話す」能力ともに基礎段階（レベル1）または要支援段階（レベル2）であり、コース開始時と比べて日本語能力が伸びたといえる。また、1名はコース開始時の日本語能力の指標となるものがないが、「聞く」能力、「話す」能力ともに要支援段階（レベル2）であった。
　一方で、継続的に通っていたものの、第21回から第32回にかけて「話す」能力が要支援段階（レベル2）から基礎段階（レベル1）に下がった学習者（1名）もいた。様々な原因が考えられるが、今年度の教室の課題として、同じ母語の講師・学習者が多いことから、授業内における母語の使用が増加したことが考えられる。本教室は「直接法」を採用しているが、一部の学習者には「講師も母語がわかるのであれば母語がよい」という考えがあったことが講師間の会議で報告された。さらに、セッションの途中で辞めてしまった学習者も複数見られた。そのうち2名は、「授業中の先生の指示がわからない」「授業が難しい」と話していたという。対面の授業では、仮にわからないことがあれば全体の進行に影響を与えない方法で、他の学習者に聞くことができたが、オンライン授業ではそれが難しい。結果として、媒介語の使用が始まると、しばらくそのやりとりが続き、講師やほかの学習者が待たされることが多々あった。

2. コミュニティの中での主体的・自律的な学習
・学習ポートフォリオを用い、毎週の授業で講師と学習者各1、2名ずつが「1週間の日本語学習と達成度」を話す時間を設けた。その中で、講師から学習方法を提案するのみならず、学習者が互いに提案する様子も見られた。翌週以降の授業では「本を買った」、「アプリをダウンロードした」などの報告があった。オンライン授業でも毎週顔を合わせる中で学習者同士が知り合いとなり、授業開始前後の時間でも他愛のない話をするようになり、親しくなっていく様子が観察された。
　限られた範囲の学習者コミュニティとはいえ、他者から影響を受けながら自律的に日本語学習に取り組む様子が見られた。しかし、教室外の日常的なコミュニティの中での学びについては、社会状況の変化もあり、十分な促しができたとは言えない。

3. 日本語及び日本社会についての理解および参加者のコミュニケーション能力の向上
・日本語学習者は、日本語学習を通じて、日本語及び日本社会への理解が進んでいる。
・感染症拡大により、地域連携授業やコミュニティ参加の促進を計画することが難しくなった。しかし、東京消防庁豊島消防署目白出張所の協力を得て、オンラインで地域連携授業を行うことができた。連携授業の際には、消防士と通報訓練を行うだけでなく、消防署の仕事内容や、通報の流れなどについて母語で質問をする機会もあり、母国との違いを知り、日本社会に対する理解が深まった。
・消防署員（2名）からは異文化に対する理解、日本語学習への理解、異なる言語・文化の中での生活の苦労に対する共感などの声が聞かれ、外国人住民に対する理解における成果があったと考えられる。

(3) 今後の改善点について

1. 日本語を日本語で学ぶ意義・効果の具体化
　学習者から「媒介語で学ぶ方が良い」といった声があった原因として、「講師の指示を学習者が理解できない」こと、「教室において媒介語を用いたやり取りが容易な環境になっている」ことが考えられる。後者についてはオンライン授業においては、同じ空間で複数の会話を同時進行させることが難しいことも原因だと考えられる。対面の授業では、仮にわからないことがあれば隣同士聞きあうことができたが、オンライン授業では媒介語の使用が始まると、しばらくそのやりとりが続き、講師やほかの学習者が待たされることが多々あった。
　これらを解決するには、講師の指示やコミュニケーションの取り方を改善していく必要がある。学習者にとってわかりやすい指示をしたり、学習者による媒介語での会話が始まった際には教師が主導権を握ったりするなど、教師としての「コミュニケーション」方法を模索していきたい。さらに、学習者にとってコミュニケーションの成功が学習の喜びに繋がるよう工夫することによって、「日本語を日本語で学ぶ意味」を実感してもらう授業を提供していく必要があると考える。

2. コミュニティの形成 について
　コミュニティの形成は一部成功したが、一方で課題もあった。コースの初めは学習者の出身・ルーツが多様であったが、コースが終盤に近づくにつれて偏りが見られ、平均参加者6～8名のうち1名以外は同国出身の学習者、もしくは全員同国出身の学習者ということがあった。これは、1. で述べた授業における媒介語の使用が一因であると考える。同じ母語の学習者同士は親しくなるが、ほかの母語の学習者は話に入ることが難しそうな様子が見られ、また、わからないことや聞きたいことを伝えるために会話のターンをとることが困難な様子であった。出身・母語を超えたコミュニティを形成するための工夫として、他愛のない話でも講師が仲介したり、授業内において形式的なやりとりだけではなく学習者同士が知り合えるような機会を増やしたりすることなどが考えられる。オンライン形式の授業を行う場合であっても、コミュニティの形成が可能となる方法を模索する必要がある。

＜取組2：教室B（ぐんぐんクラス）＞ 【令和2年5月23日～令和2年12月12日】

取組の名称	コミュニティを基盤とする自律的・協働的な日本語学習・使用の促進–「学習院大学わくわくとしま日本語教室」–＜教室B：ぐんぐんクラス＞
取組の目標	1. 基礎的な日本語能力を持たない外国籍住民が、社会の一員として生活するために必要となる日本語の基礎を身に付け、日常生活の中で日本語を使えるようになる。 2. 外国籍住民が公的機関、各種サークル等との活動を通じ、コミュニティの中で自律的・協働的に学び続けるための能力を培い、催し等に主体的に参加するようになる。 3. 日本語及び日本社会について理解を深め、参加者それぞれがコミュニケーション能力を向上する。
取組の内容	教室B（ぐんぐんクラス）では、以下を行った。 1. 日本語能力の育成：多様な背景、ニーズ、感染症拡大に伴う生活環境の変化に配慮した活動や教材を設計し、日本語能力の育成を行った。 2. 学ぶ力の育成：2016年度から3年間実施したブラッシュアップ講座（教育人材育成のための研修）での学びを生かし、学習者が自身の日本語学習や日本語使用を自律的に管理することを促すため、適切な評価システムや本教室作成のポートフォリオを活用した。学びを促す各種リソース、文化庁や国際交流基金が開発したICT教材やe-learningシステム、スマホ等機材も積極的に活用した。 3. コミュニティの中での学び：感染症拡大の影響により、「対面でのやりとりの重要性を実感できる活動」は11月21日の一回のみであったが、オンライン形式での授業を活用し、コミュニティの参加・活用・形成を行いながら、社会の一員であることを意識できる活動、他者とつながる活動を通じて、自律的・協働的に学ぶことを実感できる活動を取り入れた。
□ 空白地域を含む場合，空白地域での活動	該当しない
取組による体制整備	感染症拡大により、公的機関、民間団体、各種サークル等との活動を実施することはできなかったが、人とつながる機会が減少した状況下でもオンライン形式の授業や11月21日に行った対面授業により、コミュニティを形成し、地域社会とのつながりを模索することができた。
取組による日本語能力の向上	生活に関する日本語だけでなく、人間関係を構築するための日本語、社会の一員としての日本語を身に付けることが可能となった。また、地域社会とのつながりを持ちながら、自律的かつ協働的に学ぶ力を育むことができた。
参加対象者	豊島区及び近隣区域に暮らす外国人 （日本についての知識は豊富だが、一人でできることが限られている学習者）
参加者数 （内 外国人数）	56人（56人）
広報及び募集方法	チラシ作成。豊島区HP、大学HP及びSNSによる周知。
開催時間数	総時間　52.5　時間 （空白地域0時間）
内訳	2.5　時間　×　21　回
主な連携・協働先	豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習振興グループ、雑司ヶ谷地域文化創造センター

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	計
	28	2		13		2			3		48
※該当する場合のみ	イエメン(3人)、台湾(2人)、ミャンマー(2人)、カナダ(1人)										

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和2年5月23日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	オリエンテーション	講師・受講者が共にZoomの操作に慣れること、お互いを知ることを目的にZoomの操作説明、自己紹介、教室の概要説明を行った。	地引愛 ＜無償＞ 崔莉莉 丸山将英 楊凌眉 澤口瑠璃	なし
2	令和2年5月30日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	お気に入り	部屋にあるお気に入りのものを実物や写真等を使いながら、いつどこで買ったか、どうして好きなのか、紹介する練習を行った。また、相手の紹介に対して質問したり、相づちや短い感想を言う等の反応を交えながらグループで紹介する活動を行った。	丸山将英 澤口瑠璃	澤口瑠璃(指導補助) 丸山将英(指導補助)
3	令和2年6月6日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	一番おいしい朝ごはん	一番おいしいと思う朝食を実物や写真を使って紹介し、どうしてその朝食がいいのか理由を説明する練習を行った。また、相手の紹介に対して分からないことを聞き返したり、相づちや短い感想を言ったりしながらグループで紹介する活動を行った。	【前半】 楊凌眉 【後半】 崔莉莉	崔莉莉(指導補助) 楊凌眉(指導補助)

4	令和2年6月13日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	17	運動不足	コロナで生活様式が変わったことを踏まえ、以前は何をしていたのか、現在は何をしているか、一年前と比べて変化があったことを具体的に説明する練習を行った。	【前半】 崔莉莉 【後半】 楊凌眉	楊凌眉(指導補助 崔莉莉(指導補助)
5	令和2年6月20日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	11	希望を話す	宝くじの当選や日本語の上達等、仮定や将来の出来事について具体的な希望を言う練習をした。授業の最後には宝くじが当選した時のお金の使い道についてグループで発表し、お互いに質問しあったり、反応を示したりした。	【前半】 丸山将英 【後半】 地引愛 ＜無償＞	楊凌眉(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
6	令和2年6月27日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	旅行先を決める	複数の選択肢がある中で、賛成・反対などの自分の意見や希望を理由を交えながら話す練習を行い、グループで旅行先を一つ決める活動を行った。	【前半】 崔莉莉 【後半】 澤口瑠璃	澤口瑠璃(指導補助) 崔莉莉(指導補助)
7	令和2年7月4日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	誘いの断り方	友人や同僚、先輩や先生などから、依頼や誘いを受けたとき、相手に不快な印象を与えずに断る表現や代案を言う練習をし、学習者同士でロールプレイを行った。	【前半】 丸山将英 【後半】 楊凌眉	楊凌眉(指導補助) 丸山将英(指導補助)
8	令和2年7月25日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	13	許可を求める	オンラインで会話中に、宅配便が来た等の理由で席を離れることを相手(上司・同僚・友人)に伝え、許可を求める表現の練習を行った。	地引愛 ＜無償＞	崔莉莉(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
9	令和2年8月1日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	14	プレゼント購入を相談する	友人と共通の友人のプレゼントを買うために、買う物や予算などについて、自分の意見を述べたり、相手の意見を聞いて調整したりする練習を行い、グループでギフトを選ぶロールプレイを行った。	【前半】 丸山将英 【後半】 地引愛 ＜無償＞	澤口瑠璃(指導補助)
10	令和2年8月8日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	電化製品を選ぶ	電気店で店員に携帯電話や洗濯機など買いたい商品の機能やデザインについて自分の好みや希望を説明したり、値段を交渉する練習を行い、学習者同士でロールプレイを行った。	【前半】 澤口瑠璃 【後半】 楊凌眉	楊凌眉(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
11	令和2年8月22日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	大家に苦情を伝える	隣の住人と騒音や異臭などの問題が生じたとき、管理人や大家にある程度詳しく状況を説明し、苦情を伝える表現を練習し、相手の性格や状況に応じて言い方を工夫しながら、ロールプレイを行った。	【前半】 楊凌眉 【後半】 地引愛 ＜無償＞	崔莉莉(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
12	令和2年8月29日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	11	返品・交換を依頼する	衣料品店などで、店員に購入したばかりの商品の不具合などを簡単に説明し、返品や取り換えを要求する練習を行った。また、それに対する店員の返答を聞いて理解する練習を行った。	【前半】 崔莉莉 【後半】 オウシショウ	オウシショウ(指導補助) 崔莉莉(指導補助)
13	令和2年9月5日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	近所の店の情報を得る	近所にあるレストランに関して、おすすめのお店や知りたい情報を友人に質問したり、反対に友人に聞かれたときに答える練習をし、ペアでロールプレイを行った。	【前半】 澤口瑠璃 【後半】 周茹セイ	周茹セイ(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
14	令和2年9月12日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	遅刻の理由を説明する	待ち合わせの時間に遅れたり、約束を守れなかったりしたときに謝る表現や、その理由を説明する練習を行った。	【前半】 丸山将英 【後半】 崔莉莉	崔莉莉(指導補助) 丸山将英(指導補助)
15	令和2年10月3日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	顔見知りとのあいさつ	エレベーターや公園、街中などで、顔見知りの人に話しかけられたときに相づちだけでなく、短い簡単な言葉で答えたり、自分から天気や相手の持ち物、近況などの話題で話しかける練習を行った。また、ロールプレイではペアで状況設定も行い、会話を発表した。	地引愛 ＜無償＞	澤口瑠璃(指導補助)
	令和2年10月10日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	＜教育実習＞ アニメ・ドラマの別れの挨拶	アニメやドラマなどに出てくる「別れの挨拶」の紹介を行い、様々な別れの表現を状況に応じて言えるように練習を行った。	＜実習生＞ 藤井蒼太 河津沙英 花岡黎華	地引愛 ＜無償＞

	令和2年10月17日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	＜教育実習＞ 俳句の創作	俳句の持つリズムに乗せて「自分の伝えたいことを表現すること」を目的に「五七五」や「季語」など俳句のルールの紹介をし、実際に俳句を創作した。	＜実習生＞ 青木渚 石川舞穂	地引愛 ＜無償＞
16	令和2年10月24日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	8	美容室	美容室や理容室で、自分の希望の髪形をある程度詳しく伝えたり、美容師が切り終えた時の確認で気になったことを伝える表現の練習を行い、ペアでロールプレイを行った。	【前半】 澤口瑠璃 【後半】 オウシショウ	オウシショウ(指導補助) 澤口瑠璃(指導補助)
	令和2年10月31日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	6	＜教育実習＞ SNSのスタンプのオノマトペ	SNSのスタンプで使用されるオノマトペに焦点を当て、各オノマトペが表してる気持ちや感情、行動を紹介し、それらを使ったオリジナルのスタンプを創作する活動を行った。	＜実習生＞ 林未生 大江凪紗 西川貴美子	地引愛 ＜無償＞
	令和2年11月7日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	＜教育実習＞ アニメにある役割語	アニメのキャラクターが話す言葉から人物の特性を理解するために、様々な一人称や語尾などキャラクター特有の役割語を紹介し、会話練習を行った。	＜実習生＞ 松島梨々花 鈴木玖瑠美 卓奕キン	地引愛 ＜無償＞
17	令和2年11月14日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	12	レストラン	レストランで注文するときに知らない料理を聞く、飲み物やデザートのタイミングを伝える、注文の間違いを指摘する、注文をキャンセルするなど、店員と話す練習を行った後、学習者同士でロールプレイを行った。その際、店員役の学習者は自分の国の料理を売るレストランの店員という設定で行った。	【前半】 周茹セイ 【後半】 オウシショウ	オウシショウ(指導補助) 周茹セイ(指導補助)
18	令和2年11月21日(土) 10:00～12:30	2.5	雑司が谷地域文化創造館	7	地域施設利用	本教室終了後も、地域のコミュニティに参加することできることを目標に、HPやチラシ、区報から地域の教室やイベントの情報を読み取る活動を行い、参加したい教室やイベントを探す活動を行った。	【前半】 澤口瑠璃 【後半】 周茹セイ	オウシショウ(指導補助)
19	令和2年11月28日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	10	電車	駅のホームで、電車の運休や運転見合わせなどのアナウンスを聞いて理解する練習や何が起こったかわからないときに、近くの人や駅員に状況を尋ねる練習を行った。	オウシショウ	周茹セイ(指導補助)
20	令和2年12月5日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	薬局	薬局で薬剤師に自分の症状やほしい薬の条件を伝えたり、薬の飲み方などを尋ねたりする練習を行った。また、薬剤師の薬の飲み方や薬の形状などの説明を聞いて理解する練習を行った。	周茹セイ	澤口瑠璃(指導補助))
21	令和2年12月12日(土) 10:00～12:30	2.5	オンライン （Zoom）	9	知り合いとのあいさつ	久しぶりに会った知り合いと年末年始のあいさつをし、近況の報告をし合う練習を行った。また相手の話を聞いて、驚き、喜び、悲しみなどの共感を示す表現の練習もし、ロールプレイを行った。	澤口瑠璃	オウシショウ(指導補助)
計		62.5		253				

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

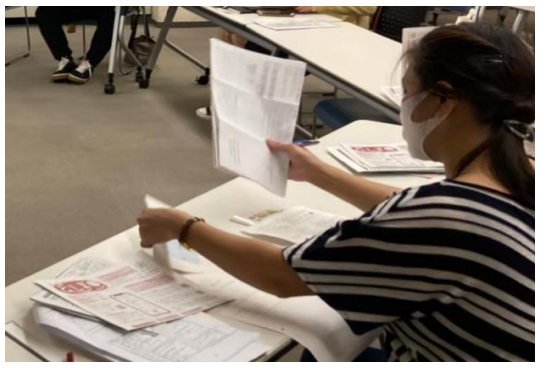
〇取組事例①

【第16回　令和2年10月26日】
美容室で美容師に自分の希望する髪形やイメージを伝えたり、切り終えた際の確認で気になるところを伝える授業を行った。授業の前半では様々な写真やイラストを使用し、希望の髪形を伝えるための表現を学んだ。授業の後半では学んだ表現を使って、自分の希望の髪形を伝える練習をし、学習者同士でペアになり、ロールプレイを行った。ロールプレイでは客役の希望の髪形が美容師役の学習者に伝わったかどうか、イラストに描くことによって確認した。

(写真：左)講師が学習者にロールプレイで書くイラストの例を見せているところ
(写真：中央・右)美容師役の学習者が注文を聞いて書いたイラストを見せて確認しているところ

〇取組事例②

【第18回　令和2年11月21日】
教室が終了した後も、学習者が地域社会と関わりながら自律的かつ協働的に日本語学習が行えるように、HPやパンフレット、区報から公共施設で行われている教室や区内のイベント情報を読みとる授業を行い、自分の趣味や興味に関係する教室やイベントを探す活動を実施した。
雑司ヶ谷文化創造館で行い、今年度の教室B（ぐんぐんクラス）の中で唯一行うことができた対面授業であった。
対面授業であることを活かして、近くにあった雑司ヶ谷体育館でどのような教室やイベントが行われているのか見学も行った。
(写真：左)学習者が雑司ヶ谷体育館のチラシから興味のある教室を探しているところ
(写真：右)学習者がチラシや「広報としま」から自分の興味のあるイベントを探しているところ



(2)　目標の達成状況・成果

1. 基礎的な日本語能力
「とよた日本語能力判定」を参考に本教室が独自に作成した「日本語能力判定レベル表」に基づき日本語能力判定を行ったところ、継続的に本教室に参加していた学習者9名が全6レベル中の3レベルに到達していた。このレベルは「自立段階」と言い、周囲の支援や資源を自ら活用して日常的な社会参加ができるレベルである。この判定結果から、社会の一員として生活するために必要となる日本語の基礎を身に付けることに一定の成果があったといえる。

2. 日常生活での日本語使用
各セッションの終了後に行っているアンケート結果から、学習者のほとんどが「以前と比べて生活で日本語を使うようになった」と回答しており、日常生活で日本語を使用頻度が増えたことが分かった。また毎週の授業で行っていた「一週間の振り返り」の際、授業で扱ったテーマである「顔見知りとのあいさつ」「返品・交換」「美容院」「レストラン」等に関連して、「美容院に行って美容師と日本語で話した」「レストランに行ったときに注文間違いがあり、授業で練習したことを使った」「日本人に自分から話しかけた」といった声があり、日本語の使用範囲が広くなり、生活を広げることができた。

3. 自律的・協働的な学習を続ける能力
「一週間の振り返り」で学習者同士が日本語学習や日本語使用を共有している中で、他の学習者の学習方法を取り入れ、新たにチャレンジしている様子が見受けられた。また、「忙しいから、勉強していない」と毎週言っていた学習者が「一週間の振り返り」を繰り返すうちに、他の学習者から影響を受け、少しずつ日本語学習を行うようになった。学習者同士の交流を通して、自律的且つ協働的に学習する能力を養成することができたと考えられる。

4. コミュニティへの参加・形成
地域施設を利用した対面授業で、興味のある教室やイベントを探すという活動を行った際に、「水泳が好きだから、家の近くの水泳教室を調べてみます」や「以前バドミントンをしていたので、教室に参加したい」、セッションの振り返りをしている際に、「教室が終わった後も日本語でチャットや電話をしましょう」という学習者同士のやり取りがあった。このやり取りから、コミュニティに参加しようという意欲を持たせたり、対面で会うことが難しい状況でも、オンラインの教室参加を通して、日本語学習者コミュニティを形成したりすることができたことがうかがえる。

5. コミュニケーション能力の向上
授業前の「一週間の振り返り」や授業後の「活動の記録」などのポートフォリオ活動において、セッションのはじめの頃は講師が質問し学習者が答えるというように教師主導であったが、セッションが進むにつれて教師が介入することなく学習者同士で行うようになった。またその際、単語が分からない、うまく文が作れないということもあったが、学習者は別の言葉に言い換える、写真を見せる、紙に文字を書いて見せる等工夫をしながらコミュニケーションをとっていた。これらの活動の観察からコミュニケーション能力の向上がうかがえる。

(3)　今後の改善点について

1.日本語能力の育成
授業中のロールプレイや発表の様子から、順序立てて話したり、まとまりのある話をしたりする談話構成能力に課題を抱える学習者が少なくないことがわかった。授業では生活のある場面で使用する表現をそれぞれ扱ってきたが、今後は談話構成能力の育成をどのようにコースに組み込むのかが課題である。

2.コミュニティへの参加
地域施設を利用した授業でコミュニティ参加への道を模索することはできたが、新型コロナウイルスの影響もあり、一部の学習者は対面授業に参加できなかった。また、今年度は対面で行うことが難しい活動は休止状態である場合もあった。今後はオンラインによる活動も含め参加を促すとともに、情勢の変化に応じて、オンライン形式と対面形式を組み合わせながら、コミュニティの参加・形成を促進することが課題である。

3.対象となる学習者への広報
本教室は生活のための日本語を学ぶことを目的としており、その対象は生活者である外国人であるが、コースの途中で日本語学校に通う留学生が来ることが増えた。それに伴い、各授業の参加者は10人前後であるにもかかわらず、全受講者は56人と、1回あるいは数回参加した後来なくなる学習者が多く見られた。これは対象である生活者としての外国人への広報活動が足りず、情報が行き届いていないことと対象が誰かを明確に示していないことが原因であると考えられる。今後はチラシやHPによる周知だけではなく、SNS等あらゆる媒体を使って広報活動をすると同時に、本来の対象者が明確になるような工夫をする必要がある。

＜取組3＞【実施期間:令和　3年3月　6日～令和　3年　3月　6日】

取組の名称	地域日本語教育シンポジウム「豊かな日本語使用」を考える」の開催
取組の目標	1. 豊島区日本語教育ネットワーク「日本語ネットとしま」の活動と、在住外国人に対する調査の結果を報告し、豊島区における日本語学習・教育についての課題を共有する 2. 本事業における日本語教育事業と人材育成事業を含め、教育実践に関する事例紹介と外部講師による講演を通じて、日本語学習・使用を促進するために、コミュニティが果たす役割と具体的方策について検討する
取組の内容	1. 2020年度における豊島区日本語教育ネットワーク「日本語ネットとしま」の活動、在住外国人に対する調査の結果を報告し、豊島区より多文化共生推進施策について説明した。その上で、在住外国人の日本語使用の実態に基づいた環境作りについて、参加者と意見を交換した。 2. 2019年度の調査結果も併せて示し、豊島区における日本語学習環境における課題を検討した。 3. 本学による「日本語使用」を焦点に当てた日本語学習活動や人材育成研修の事例を含め、「日本語ネットとしま」メンバーによる活動報告により、コロナ禍における日本語学習の継続のための工夫を共有した。第二言語習得研究の専門家による、理論を実践に生かすための講演を行い、「豊かな日本語使用」の推進に向けて検討した。
□ 空白地域を含む場合，空白地域での活動	該当しない
取組による体制整備	在住外国人に対する調査結果を広く公開し、学習環境作り、体制整備、日本語による教室内外のやりとりの在り方などについて意見交換をすることにより、「日本語ネットとしま」の関係者のみならず、一般の住民にも当事者意識を持ってもらえる機会を作ることができた。
取組による日本語能力の向上	本取組において、日本語能力の向上に関する直接的な効果は目的としない。
参加対象者	「日本語ネットとしま」構成員、豊島区及び近隣地域在住・在勤・在学で「豊かな日本語使用」に関心のある住民
参加者数 （内 外国人数）	71　人（12人） （会場30人、オンライン41人）
広報及び募集方法	チラシ作成・配布・配置（豊島区窓口等）。豊島区HP、大学HP、日本語教育や多文化共生、異文化理解関係のML、及びSNSによる周知。
開催時間数	総時間　3．5時間（空白地域0時間 内訳　3．5時間　×　1　回
主な連携・協働先	豊島区政策経営部企画課多文化共生推進グループ、豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ、豊島区教育センター、豊島区教育委員会、区内日本語教室、各種自主サークル

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	計
	9				2					59	70
※該当する場合のみ	台湾　1										

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和3年3月6日(土) 13:30～17:00	3.5	学習院大学西5号館301 オンライン（Zoom）	71	「豊かな日本語使用」について考える	1.趣旨説明:「豊かな日本語使用」について考えることの意味 2.豊島区多文化共生推進施策の現状（豊島区政策経営部企画課多文化共生推進グループ） 3.「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」報告 4.講演「第二言語習得の理論を実践に生かすーインプット、インターアクションの役割とはー」 5. 地域における日本語学習環境作りー豊島区の現状と可能性ー 6. 来年度・今後に向けて:今後の計画、意見交換	講師:中上亜樹（講演、無償）	発表者（無償）:金田智子、山野邊暢、唐木澤みどり、水上千春、安藤聡子、杜長俊 発表者:岩田香里、深谷幸紀、坂中弘樹、辻きよみ、ジーシー　プラサンガ 講師補助者:譚穎楠、関根千紘、澤口瑠璃
計		3.5		71				

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

〇取組事例①（シンポジウムの開催は1回であるため、事例も1例のみである）

〇地域における日本語学習環境作り－豊島区の現状と可能性－（現状の説明と区内団体の活動報告）
　豊島区内の日本語学習環境について豊島区より現状を説明した後、区内で活動する6つの日本語教育関連団体による活動報告を行った。今年度は、コロナ禍にあり、これまで通りの活動が難しく、各団体とも工夫しながら活動の継続を模索していたため、その活動の工夫を共有することを通して、今後の日本語学習環境作りの一助となることを目指した。
（1）今年度の豊島区の現状についての説明（豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ）
（2）区内6つの団体による今年度の活動報告（団体の概要、2020年度の活動状況、活動において工夫したこと等）

（写真：左）学習院大学わくわくとしま日本語教室の報告　　（写真：右）NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク　池袋WAKUWAKU勉強会

（2）　目標の達成状況・成果

・豊島区日本語教育ネットワーク「日本語ネットとしま」の活動と、在住外国人に対する調査の結果を報告し、豊島区の多文化共生推進施策、日本語学習環境の状況も伝えることができ、日本語学習・教育についての連携や体制整備に関する課題を共有することができた。アンケートでは、豊島区の日本語教育機関や組織の連携が「おおいに進んだ」「進んだ」と答えた参加者が合わせて74.2%、「少し進んだ」も合わせると90.3%となった。地域住民のための日本語教育の体制整備については「大いに進んだ」「進んだ」は合わせて58.1%、「少し進んだ」も合わせると90.4%となるが、体制整備に向けてさらなる連携協力と新たな方策が必要である。
・本事業における日本語教育事業と人材育成事業を含め、日本語ネットとしまメンバーの団体による教育実践に関する活動事例紹介、本学文学部の講師による第二言語習得理論についての講演、および報告発表等を踏まえた参加者による意見交換を通じて、日本語学習・使用を促進するために、コミュニティが果たす役割と具体的方策について検討することができた。例えば区内の日本語学習環境の周知、支援者を増やすための養成講座、外国人と日本人が参加しやすく交流できる場とそのための拠点、連携の重要性などが挙げられた。
・2019年度のように大学会場でのシンポジウム開催ができなくなる恐れもあったため、今年度は対面形式とオンライン形式の併用で開催することにした。これにより緊急事態宣言下においてもシンポジウムが開催でき、豊島区及び近隣在住・在勤・在学の住民にも広く今年度の成果を伝え、意見交換を行うことができた。シンポジウム終了後のアンケートでは、新しい情報や知識が「おおいに得られた」「得られた」と回答した参加者は合わせて96.7%、参加を通じて地域の日本語教育について理解が「おおいに深まった」「深まった」と回答した参加者は合わせて83.9%となった。

（3）　今後の改善点について

・今後もシンポジウムは対面とオンラインを併用した開催が必要であると思われるが、オンライン併用での開催における音声や映像等の技術的な部分で不十分な部分があった。今後改善の余地がある。
・アンケートの結果から、区内の日本語教育機関や組織の連携が進んでいることは認められたが、それに比較すると、日本語教育の体制整備に関しては、今年度はまだ十分とは言えなかった。来年度は日本語教育の体制整備に向けて、具体的な方策を進めていく必要がある。
・参加者のうち、日本語教育に関わりのない「一般の住民」は1割弱である。「豊かな日本語使用」は、一般の住民による外国人・学習者理解が重要であることからも、今後、一般住民に興味を持ってもらえる内容・方法を検討していきたい。

＜取組4＞ 【実施期間：令和2年10月10日～令和3年2月6日】

取組の名称	人材の育成：豊かな言語使用につながるコミュニケーション能力の醸成
取組の目標	1. 熟達した日本語話者が、日本語能力が十分でない人と口頭でのやりとりをする際に、自身の日本語を相手に合わせて調整し、相手の発話を促したりすることができるようになる。 2. 上記1を通じて、日本語学習者に対し、量的・質的に豊かなやりとりの機会を提供できるようになる。 3. 異なる背景を持つ人と接触をする際に、互いの言語・文化等を尊重し、誤解・摩擦を解消したり回避したりできるようになる。
取組の内容	1. 日本語に関する理解の促進：日本語教育を専門としない「熟達した日本語話者」が、日本語能力が十分でない人の日本語や自身の日本語について分析的に観察し、日本語の構造や特徴をあらためて確認・整理した。 2.「やさしい日本語」の理解と実践：「やさしい日本語」の法則や留意点を知り、日常的に見たり聞いたりする日本語を、わかりやすくするにはどうしたらいいか、実践を通じて理解し、その能力を身に付けた。 3. ことばの調整能力の育成：コミュニケーション・ストラテジー、意味交渉などについて学んだ上で、日本語教室（取組2）の学習者のやりとりを実践した。その実践と振り返りを通して、相手の日本語能力に合わせて自身の日本語を調整する能力を身に付けた。 4. コミュニケーション能力、及び異文化間コミュニケーションに関する理解の促進：コミュニケーション能力の構成要素、異文化間コミュニケーションにおける留意点などを講義やワークショップを通じて学び、異文化や異文化間コミュニケーションに関する知識を持つと同時に、異文化に対する意識を高めた。 ＊以上は、「日本語学習支援者」に望まれる資質・能力（文化審議会国語分科会、2019）を育成することをねらったものである。
□ 空白地域を含む場合，空白地域での活動	該当しない
取組による体制整備	熟達した日本語話者が日本語調整能力、異文化間コミュニケーション能力を身に付けることにより、職場、日本語教室、各種サークル等、様々な場面での、日本語学習者とのやりとり、相互理解が円滑になった。「日本語学習支援者」としての資質・能力を立場・年齢・背景の人々が参加する機会を設けることにより、個人的なつながりも生まれ、実生活における様々な障壁をお互いに崩していくきっかけとなった。相互理解が進み、具体的な連携体制を築くための準備態勢が整っていると考える。
取組による日本語能力の向上	「熟達した日本語話者」とはいわゆる日本語母語話者や上級レベルの日本語学習者のことである。本取組では、彼らが日本語調整能力や異文化コミュニケーション能力を身に付けることを、新たな日本語習得と捉える。同時に、彼らが学習支援者としての能力を獲得し、日本語学習者とのやりとりが豊かになっていくことによって、日本語学習者の日本語習得が進んだと考えられる。
参加対象者	豊島区在住または大学内外の「熟達した日本語話者」（いわゆる日本語母語話者や上級日本語学習者）
参加者数（内 外国人数）	18人（2人）
広報及び募集方法	チラシ作成・配布・配置（豊島区窓口等）。豊島区HP、大学HP、日本語教育や多文化共生、異文化理解関係のML、及びSNSによる周知。
開催時間数	総時間20時間（空白地域0時間）　内訳　2時間　×　10回
主な連携・協働先	豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ、豊島区教育センター、豊島区教育委員会、区内日本語教室、各種自主サークル

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）※該当する場合のみ	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	計
	1									16	17
	台湾(1人)										

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和2年10月10日(土) 13:00～15:00	2	オンライン（Zoom）	18	多文化共生って何？	本取組の概要や目標を説明した。そして、都内の各地域(豊島区、新宿区、板橋区など)の「多文化共生」をめぐる理念を確認し、地域の共通点と相違点を見つけて意見交換を行った。外国人とコミュニケーションができる機会・場所について話し合い、自身の多文化共生環境を確認した。	杜長俊(無償)	地引愛(補助者、無償)
2	令和2年10月24日(土) 13:00～15:00	2	オンライン（Zoom）	16	外国人と話す時に何に気を付けたらいいの	「時間の感覚」や「断り方」によって、異文化間の摩擦が起こっている事例を取り上げ、どうしてそこで摩擦が起っているのか意見交換を行った。そして、そのような摩擦を解消・回避するために、どのように対応すればよいか、グループで話し合った。	地引愛(無償)	杜長俊(補助者、無償)
3	令和2年10月31日(土) 13:00～15:00	2	オンライン（Zoom）	14	分かりやすく伝えよう	マンション・アパートのお知らせに書かれた日本語を「やさしい日本語」に書き換える活動を行った。各自考えたアイディアについて意見交換をし、やさしい日本語の法則に気づいた点を共有した。そして、「日本語学習者と地域日本語教室ボランティア」の会話ビデオを見て、相手の発話が分かりにくい時に意味を確認する「意味交渉」の現象を確認し、意味交渉の種類を話し合った。	杜長俊(無償)	

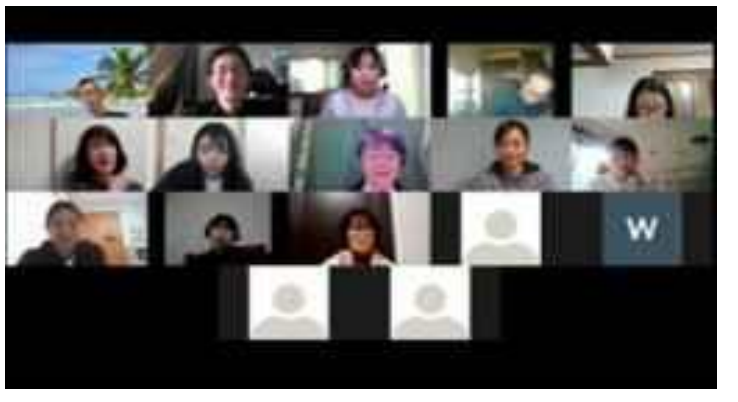
4	令和2年11月4日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	15	日本語学習者と話してみよう(1)	前半は、地域日本語教室(取組2の教室B)の授業ビデオを視聴し、学習者による意味がわかりにくい発話に対し、どのように意味交渉をすればよいか話し合った。後半は、取組2の教室Bの学習者と、初対面という場面設定で会話を行った。会話を行った後、意味交渉ができたかどうか、参加者同士が意見交換をした。	杜長俊(無償)	地引愛(補助者、無償)
5	令和2年11月21日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	16	その話を詳しく聞きたい	前半は、学習者の発話を掘り下げる質問を考える活動を行った。「趣味は料理です」という学習者の発話に対して、どのような質問ができるか、お互いが考えた質問について意見交換の活動を行った。後半は、「趣味は何ですか」と相手に質問した後で、どのように話を掘り下げるか、参加者同士で会話をした。	杜長俊(無償)	
6	令和2年12月15日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	11	外国籍の住民のライフストーリーを聞こう	前半は、講師のラビ氏の「過去、今、未来」について書かれた資料について、参加者が考えた質問を基に、Q&Aの活動を行った。「留学先として日本を選んだ理由」「ネパールにいた時にしたこと」「コロナが生活に及ぼした影響」など、様々な話題で外国籍住民のライフストーリーを聞いた。後半は、ラビ氏が日本在住のネパール人への生活支援に取組んだ経験を聞いて、意見交換を行った。	マハルザン ラビ	杜長俊(補助者、無償)
7	令和2年12月19日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	14	地域日本語教室ってどんな人が何をするところ？	地域日本語教室の理念について書かれた資料(『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』凡人社)を読み、意見交換を行った。「相互理解を深める場」「人間関係を構築する場」という地域日本語教室の理念について質問が集中していた。後半は、地域日本語教室のボランティアに必要な「聞く力」と「伝える力」、地域日本語教室の初めての日に行われるやり取りの事例について、参加者同士で意見交換を行った。	吉田聖子	杜長俊(補助者、無償)
8	令和3年1月16日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	13	地域日本語教室のボランティアと話してみよう	ボランティア2名のライフストーリーと地域日本語教室で取り組んだ事例を聞き、Q&Aを行った。 前半:山羽氏の落語や紙芝居を用いた活動 後半:大矢氏の子どもの学習支援	前半:山羽 雅大 後半:大矢 昇治	杜長俊(補助者、無償)
9	令和3年1月30日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	13	日本語学習者と話してみよう(2)	前半は、これまでの経験を振り返り、外国人とやり取りをする時の自身の課題を整理した。後半は、自身の課題を意識し、取組2の教室Aと教室Bの学習者と会話をした。その後で自身の課題をどの程度意識できたか振り返った。	杜長俊(無償)	地引愛(補助者、無償)
10	令和3年2月6日(土) 13:00～15:00	2	オンライン (Zoom)	13	日本語学習者とやりとり をする時の課題 について話そう	事前課題として、学習者との会話の一部(9回目で録画したもの)を文字に起こし、そこに見える自身の課題を整理する作業を行った。前半では、ペアで課題について話す練習を行った。後半では、ポスター発表形式で、2～3人を相手に自身の課題について、会話データを見せながら話し、意見交換をした。	杜長俊(無償)	地引愛(補助者、無償)
計		20		143				

（1）特徴的な活動風景（2～3回分）

〇取組事例①

【第7回　令和2年12月19日】
第7回「地域日本語教室ってどんな人が何をするところ？」は、長年地域日本語教育に携わっていらっしゃる吉田聖子氏が講師として、地域日本語教室の理念や、その理念を実現する方法と事例を紹介し、参加者と意見交換を行った。事前に参加者たちは、『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』の資料を読んで、詳しく知りたいところやよく分からないところを考えた。地域日本語教室は「日本語を学ぶ場」としてしか認識がなかった参加者は、「相互理解を深める場」や、「人間関係を構築する場」になっているという点について、吉田氏に積極的に質問をしていた。

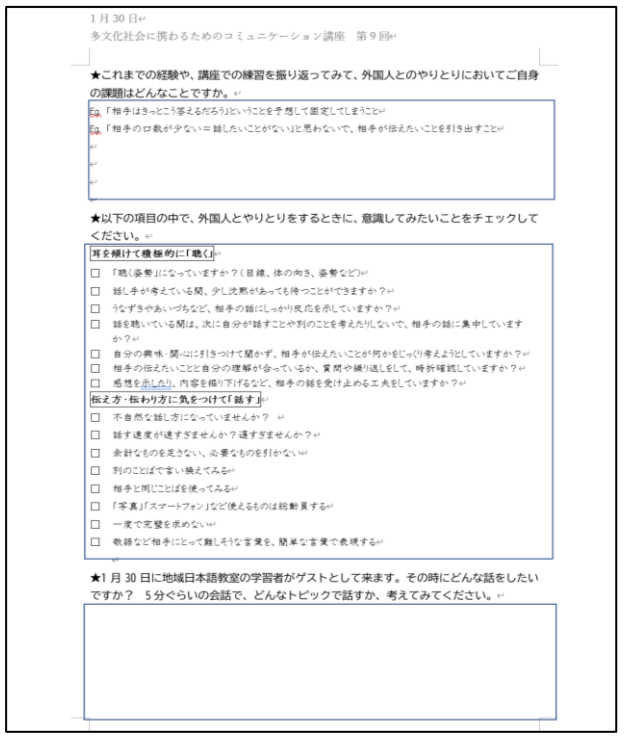
（写真）吉田氏が参加者からの質問に答えているところ



〇取組事例②

【第9回　令和3年1月30日】
第9回「外国人と話してみよう（2）は、地域日本語教室に通っている学習者と、初対面という場面設定でのやりとりを実践した。この回の前半では、外国人とやり取りをめぐってこれまでの経験を振り返り、自身の課題を見つけてグループで話し合った。後半では、その課題を意識しながら取組2の教室ABの学習者とやり取りを行った。

（写真：左）自身の課題を「自由記述」と「チェックリスト」で考える事前課題の資料の一部。
（写真：右）学習者とブレイクアウトルームで会話をしている様子。矢印で示した学習者が話したいことを紙に書いて紹介しているところ。



1月30日
多文化社会に携わるためのコミュニケーション講座　第9回

★これまでの経験や、講座での練習を振り返ってみて、外国人とのやりとりにおいてご自身の課題はどんなことですか。

Eg.「相手はきっとこう答えるだろう」ということを予想して固定してしまうこと
Eg.「相手の口数が少ない＝話したいことがない」と思わないで、相手が伝えたいことを引き出すこと

★以下の項目の中で、外国人とやりとりをするときに、意識してみたいことをチェックしてください。

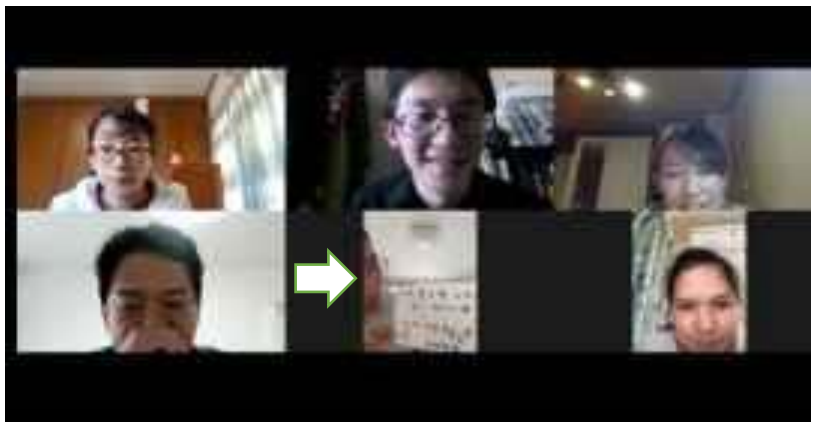
耳を傾けて積極的に「聴く」

- □ 「聴く姿勢」になっていますか？（目線、体の向き、姿勢など）
- □ 話し手が考えている間、少し沈黙があっても待つことができますか？
- □ うなずきやあいづちなど、相手の話にしっかり反応を示していますか？
- □ 話を聴いている間は、次に自分が話すことや別のことを考えたりしないで、相手の話に集中していますか？
- □ 自分の興味・関心に引きつけて聞かず、相手が伝えたいことが何かをじっくり考えようとしていますか？
- □ 相手の伝えたいことと自分の理解が合っているか、質問や繰り返しをして、時折確認していますか？
- □ 感想を示したり、内容を掘り下げるなど、相手の話を受け止める工夫をしていますか？

伝え方・伝わり方に気をつけて「話す」

- □ 不自然な話し方になっていませんか？
- □ 話す速度が速すぎませんか？遅すぎませんか？
- □ 余計なものを足さない、必要なものを引かない
- □ 別のことばで言い換えてみる
- □ 相手と同じことばを使ってみる
- □ 「写真」「スマートフォン」など使えるものは総動員する
- □ 一度で完璧を求めない
- □ 敬語など相手にとって難しそうな言葉を、簡単な言葉で表現する

★1月30日に地域日本語教室の学習者がゲストとして来ます。その時にどんな話をしたいですか？　5分ぐらいの会話で、どんなトピックで話すか、考えてみてください。



(2) 目標の達成状況・成果

1. 日本語の調整
「やさしい日本語」への書き換えや、自身の発話や質問が学習者に通じない場合の言い直しなどの練習を通して、相手に合わせて自身の言葉を調整することとは何かについて徐々に理解することができた。このことは、当該の練習を扱った授業の終了時に、参加者が振り返りシートに記載していた。参加者自身がその変化・成長を実感できたと言える。また、授業においては、「学習者と話す想定でロールプレーを行う練習」「外国人とやり取りを実践する活動」の中でも、言葉を調整する努力や実践が観察されている。やり取りの実践に協力してくれた学習者にヒアリングしたところ、自身のレベルに合わせて日本語を簡単にしてくれている努力が素晴らしいという感想が多くあった。以上のように、日本語能力が十分でない人と口頭でのやり取りを行う際に、自身の日本語を調整する能力の向上は、様々な側面から確認できたと言えよう。
2. 豊かなやり取りの機会の提供
コロナ感染症の影響で、普段の生活の中で外国人とやり取りをする機会がなくなったという参加者の声が多く寄せられた。本取組で用意した外国人とのやり取りを実践する2回の活動（第4回、第9回）は、授業の期間中に外国人とやり取りを行える貴重な機会になっている。1回目の活動ではできなかった「相手の話を掘り下げること」や「相手の話に対して自身の理解・感想を言うこと」が、2回目の活動ではできるようになったという感想が報告された。このことから、学習者に豊かなやり取りの機会を提供する側面において、参加者の進歩が見られていると言えよう。また、学習者とのやり取りについて、会話データを基に自身の課題を話す回（第10回）では、「文法的な間違いがある発話を確認すること」「相手に質問するだけではなく、自身ことも話すこと（自己開示）」など、教えられたことだけではなく、実践からも学べるようになっていることが分かる。こうして、生活の中で外国人とのやり取りの機会が制限されている現状の中で、豊かなやり取りの機会の提供において「実践を通して改善を目指す」という姿勢が定着しつつある。
3. 異なる背景を持つ人との接触・コミュニケーション
本講座では、「地域住民」と「大学生」が多文化共生や異文化コミュニケーションなどのテーマについて話し合いをした。授業終了後のアンケートでは、講師や参加者との話し合いを通して考えが深まったかという問いに対して、「大いに深まった（8割）」「深まった(2割)」という結果があった。このことから、仕事や生活環境が異なるという状況で、互いの文化や考え方を理解・尊重し、話し合いに取組んでいることが分かった。また、外国人とのやりとりの実践を通して、「相手の発話の意味を確認すること」「相手の話を掘り下げること」「相手の話に対して理解・感想を言うこと」などができるようになったことが報告された。このことから、国籍や言語が異なる相手に対しても、やり取りの中で生じうる誤解・摩擦を解消する能力が向上していると言えよう。
4. 地域日本語教室への関わり
第7回と第8回では、地域日本語教室に関わっている方の経験を聞いて、意見交換の活動を行った。授業終了時に書く振り返りの中で、「東京でも区によって地域日本語教室の種類が異なることが面白かった」や「地域日本語教室は学校のようなものだと思っていたが、文化の行事を取り扱う活動や子どもが楽しめる取組などもしていることを知り、地域日本語教室に参加してみたくなった」というような、地域日本語教室への理解を深めることができたと言えよう。さらに、アンケートには、「地域日本語のボランティアに挑戦したい」「子どもの学習支援のボランティアを始める予定」「区のボランティアのメールアドレスに登録した」というような、地域日本語教室に関わる意欲を表明するコメントがあった。

(3) 今後の改善点について

1. 上級学習者の参加
上級学習者を含んだ熟達した日本語話者を対象にしているが、上級学習者は2名のみの参加にとどまっている。取組4の広報活動は取組1の区内ネットワークを活用したものの、基本的に取組2の日本語教室と同じ方法を用いているため、多文化共生や外国人の支援に興味・関心がある上級学習者や外国籍住民に、情報を届ける新たな手段を検討する必要があったと考えられる。また、上級学習者の関心を惹きつけるために、「日本語調整能力や異文化コミュニケーション能力を身に付けることで、新たな日本語学習につながる」ことが分かるように、広報用のちらしや文章の修正・加筆を行う必要があった。その作業に伴って各回の授業内容が上級学習者にとって新たな日本語習得になりうるかどうか検討していく課題が残っていると思われる。
2. 学習者とのやりとりを円滑に行う方法の整理
今回の講座の中で、学習者とのやりとりを円滑に行う方法として、「やさしい日本語の法則・留意点」「意味交渉（学習者の発話が分かりにくい場合）」「学習者の話を掘り下げる質問」をあらかじめ用意していた。学習者とのやり取りを実践している中で、参加者が難しいと感じている部分について、「意味交渉（自身の発話が学習者にとって分かりにくい場合）「質問をした後、学習者の答えを咀嚼し、感想を言うなど、答えを受け止める行動」などの練習を追加した。このことから、あらかじめ用意した内容は、外国人とのやり取りを円滑に行うためには不十分であったことが言える。また、間違いのあった学習者の発話をどのように対応するか、または学習者のレベルに合わせて言葉を調整する際に、文型の難しさをどのように判断するかなど、その都度講師からのフィードバックがあったものの、第2言語習得に関わる情報提供も欠けていた。以上述べた問題を解決するために、外国人とのやりとりを円滑に行う方法や知識を整理し、取り入れる順番を再検討する作業が必要となる。
3. 学習者とのやり取りの実践
取組2の日本語教室の学習者を招致し、参加者が日本語能力が十分でない学習者とのやり取りを実践する機会を2回設けた。1回目では授業の中で学んだ「意味交渉」を意識する、2回目で自身の課題（やりとりがうまく行かないと感じる部分）を意識するというように、達成目標を設定している。このように、2回の実践の活動は教育の成果を確かめるとともに、参加者が実践から学ぶことを促進するために作られたものとなっている。一方で、外国人とのやり取りというのは、生活の中で生じるものであり、「職場」「子どもの学校」「近所付き合い」「コミュニティ参加」など具体的な場面や状況が伴うものである。しかしながら用意した2回の機会は具体的な場面設定がなかったため、意味交渉や言葉の調整などへの意識は見られたものの、人間関係の構築や相互理解を目指す水準に達したものになっていない。生活の観点からやりとりの深さ・豊かさを目指すための工夫・配慮の不足が理由として考えられる。

4. 事業に対する評価について

（1） 事業の目的・目標

外国籍住民が、社会（コミュニティ）の一員として日本語を学び、日本語能力の高低に関係なく日本語を用いることのできる環境を作ることは、外国人が人口の約1割という存在となっている豊島区が、共生途上の段階から共生社会となるために、さらには、消滅可能性都市（日本創生会議、2014）を脱却するために、優先すべき課題の一つである。現在の豊島区はいわゆる生活者とされる大人が日本語を学べる場も、子どもが日本語学習支援を受けられる機会も十分ではなく、外国籍住民の「ライフ（人生、生活の両義）」の視点から見れば、学習機会を切れ目なく提供できているとは言えない。また、豊島区は新成人の4割が外国人であるが、彼らが学校やアルバイト先以外の場で、社会の一員として活躍する場は限られ、彼らにとって豊島区が一時的な滞在先としか捉えられていない可能性も否定できない。本事業では、2019年度に築いたネットワーク「日本語ネットとしま」において、この現状について問題提起をし、域内において漏れのない支援体制、日本語学習支援体制を築いていくための議論を進めつつ、「日本語ネットとしま」の活動として、在住外国人を対象としたアンケート調査を行い、彼らの日本語能力や日本語使用の実態と課題を明らかにする。並行して、日本語ができるようになってから日本社会に参入するという発想ではなく、外国人が最初から社会の中で日本語を試しながら日本語能力を向上させていくことをねらった日本語教育、そして、日本語母語話者らがそういった外国人とのコミュニケーションを円滑に行うための能力を持つことを目的とした研修を実施する。本事業を実施することにより、域内における課題の明確化とその解決策の具体化が進むと考える。

（2） 目的・目標の達成状況・事業の成果

2020年度は、区内日本語学習支援体制における課題の明確化とその解決策の具体化を進めることを目指して、大きく4つの事柄に取り組み、その結果を共有し意識を高める場としてシンポジウムを行った。

1.「日本語ネットとしま」における、日本語学習支援体制づくりを目指した議論
日本語教育関連団体間で情報交換、意見交換を継続することにより、課題の共有や具体策につながる検討を行うことができた。会議には区内で活躍する外国につながる区民3名も加わり、当事者とともに議論することが可能となった。会議の内外で意見交換や情報交換が盛んに行われるようになっていることから、区内のネットワークがより強化され、日本語学習支援体制の整備に向けた下地作りができた。
2. アンケート調査による在住外国人の日本語能力及び日本語使用の実態と課題の把握
「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」を豊島区との協働、日本ネットとしまの協力で行い、外国籍住民の日本語学習のニーズなどを明らかにした。結果の速報版を取組3のシンポジウムで公開し、調査実施及びその結果について区民に広く伝えることができた。翻訳版とともに学習院大学と豊島区のHPで公表し区内外に広く伝える予定である。
3. 社会の中での日本語学習・日本語使用を意図した日本語教育の実施
自己評価、日本語能力判定によると、ほとんどの学習者の日本語能力が向上したことがわかり、一定の成果が得られたと考える。また、アンケート結果や、学習者の報告から、彼らの日本語使用範囲が広がり、知り合いに出会った際に授業で学んだ表現を使ったり、自分の趣味・興味に合った教室を探したり、というように、授業での学びを生かす学習者もいたことがわかる。その一方で、教室に継続的に参加していたものの、日本語能力があまり伸びていない学習者も少なくなかった。オンライン授業の中でコミュニティを形成し、互いの学習方法について紹介し合ったりする関係が築けたとはいえ、日常的な社会生活におけるコミュニケーション機会が制限される中で、社会的な存在として日本語を使用し、学んでいくためにはどうしたらよいか、を考えることが今後の課題として残った。
4. 日本語母語話者らのコミュニケーション能力の向上
振り返りの記載、講師の観察、会話相手として協力した日本語学習者の感想から、参加者の「日本語調整能力」の向上がわかる。また、参加者によって達成度は異なるが、意味交渉や話の掘り下げなどができるようになったことも、実践後の振り返りで報告されている。最終回の報告会では、「実践→振り返り→実践の改善」のサイクルを通して、自らの課題を見つけて実践の質を高めていくことができるようになっていると確認できた。

シンポジウム参加者を対象とするアンケートの結果によると、地域住民のための日本語教育の体制整備については「大いに進んだ」「進んだ」は合わせて58.1%、「少し進んだ」も合わせると90.4%となるが、体制整備に向けてさらなる連携協力と新たな方策が必要である。

（3） 地域の関係者との連携による効果，成果　等

＜取組1・3＞
今年度も豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ及び経営政策部企画課多文化共生推進グループに相談、アドバイス、情報提供、意見交換等、連携しながら事業を進めた。特に、区内在住外国人対象の調査「「豊島区における日本語学習環境と情報交流に関する実態調査」においては、企画課多文化共生推進グループと打ち合わせを重ね、質問項目の検討、調査対象者抽出、依頼状の発送他、協力しながら進めることができた。シンポジウムでは豊島区の多文化共生推進施策や日本語学習環境の状況については豊島区か説明を行い、日本語ネットとしまのメンバーでもある区内の日本語教育関連の6団体による活動報告を行うなど、連携の効果が表れたシンポジウムとなった。
＜取組2＞
当初予定していた地域の関係者との連携授業を行うことが困難だと思われたが、東京消防庁池袋消防署目白出張所の協力を得てZoomで連携授業を実施することができた。 また、対面授業で施設を利用するにあたり、豊島区内の雑司ヶ谷地域文化創造センターにも協力を得た。社会の状況が変化した中でも、地域の施設と連携ができたことは、大きな成果であった。
しかし、今年度は感染症拡大によりオンライン授業が主となったため、例年実施している飲食店との連携授業を行うことはできなかった。社会におけるコミュニケーションのあり方が変化している中、連携授業の内容・方法も検討する必要がある。
＜取組4＞
外国籍住民や、地域日本語教室の関係者(ボランティア、コーディネーター)の協力を得て、地域の住民や本学の学生が、多文化共生を目指す取組の中身を具体的に知ることができた。

（4） 事業実施に当たっての周知・広報と，事業成果の地域への発信等について

＜取組1＞
「日本語ネットとしま」の活動については取組3のシンポジウムでメンバーの活動を報告し、周知に努めた。調査結果（速報版）は、シンポジウムで公開し、複数言語に翻訳後、学習院大学と豊島区のHP上で公開予定である（2021年3月）。
＜取組2＞
豊島区HPおよび大学HPに教室の情報とチラシを掲載し、広報を行った。また、SNSに教室情報を定期的に投稿する、各国の在住外国人コミュニティのSNS等に教室情報・チラシを投稿する等、周知・広報を行った。感染症拡大に伴い、区内の幼稚園・保育園、小中学校へのチラシの配布を控えたが、そのような状況下でも応募者が増加したことは、広報・周知において一定の成果があったと言える。その一方で、情報入手手段の限られる人に対する広報の仕方について検討が必要である。また、オンラインでの情報流通が進んだことにより、応募者の中には東京都外、国外在住の人がいたことは「地域の日本語教育」という観点において課題である。今年度の活動はシンポジウムで紹介し、実践内容・方法、オンライン授業での工夫について地域住民らと共有することができた。
＜取組3＞
シンポジウムはオンライン参加を可能とし、多くの人に内容を周知するようにした。豊島区の協力を得て、区のHPや区報への掲載、区の関連施設へのチラシの配布を行った。大学においては、HPへの掲載、ポスター掲示を行った。そのほか「日本語ネットとしま」メンバーを通じた広報や、昨年度シンポジウム申し込み者への広報等も行った。申し込みフォームのQRコードを区報やチラシに掲載し、申し込みやすくし、申し込めない人にはFAXでも対応した。豊島区及び近隣在住（在勤・在学含む）の方を対象とし、申し込みの半数以上は豊島区、約9割が東京都内在住であり、効果的な発信ができたと考える。
＜取組4＞
豊島区と学習院大学の各HPに広報チラシを掲載し、Googleフォームで申し込みを受け付けた。「日本語ネットとしま」や地域日本語教育関係者にも広報を依頼した。取組3のシンポジウムで活動報告を行い、講座の内容と方法を公開した

（5） 改善点，今後の課題について

1. ネットワークの強化
「日本語ネットとしま」の会議開催やシンポジウムでの活動紹介等を通じ、協力関係は築かれつつあると考えるが、体制整備のための具体策の提案といった、より積極的な活動にはつながっていない。会議の場のみでの情報共有では、適時適切に連携協力することも困難である。今後は、対面による情報共有以外の方法を検討していく必要がある。また、参加団体を増やし、区内関係者層の厚さを可視化することや組織として自立化することも今後の課題である。
2. データに基づく課題の洗い出しと具体的施策の検討
2020年度実施の調査結果について、より詳細な分析を進め、外国籍住民の現状を複数の観点から明らかにし、2019年度調査の結果と照らして、地域における日本語教育体制の課題を焦点化する必要がある。データの分析結果を踏まえて、学習者のニーズやレディネスに合った学習環境となっているかを「日本語ネットとしま」を始めとする関係者で検討し、課題解決に向けた具体的施策について議論をする計画である。
3. 日本語教育活動の見直しと改善
(1) 指導力の向上：日本語能力が伸びていない学習者が少なくなかったことや、本教室の対象者として適切な学習者が途中から参加しなくなることについて、日本語教育を専門とする者が担当する教室として、原因を探り解決策を講じるべきである。媒介語使用の増加は一つの原因と考えられるが、「日本語を日本語で学ぶ意味」が実感できる授業、自身の日本語能力の成長を感じられる授業を行う力を指導者は身に付ける必要がある。また、日本語の文法や語彙についてある程度の知識を持つ学習者が、談話構成能力に課題を抱えている場合があり、コースの中にどのように「談話構成能力の育成」を組み込むか、考えていく計画である。
(2) 地域関係者との新たな連携：感染症拡大下において、社会におけるコミュニケーション自体が変化した。次年度以降は、そのような変化を視野に入れつつ、いかに社会を広げていくかを意識した日本語教室をデザインし、地域関係者と新たな連携をはかりたい。
(3)「地域に根差した日本語教育活動」と広報のあり方の調整：本教室は「豊島区在住・在勤」の在住外国人を対象としており、地域に根差した教室づくりを行ってきた。SNSなど拡散が容易な媒体で広報を行う際には、参加条件について強調することや、地域で実施する意義を伝えることなどの工夫が必要である。
4. 地域住民の興味・関心の喚起
日本人や日本語熟達者のコミュニケーション能力を伸ばす取り組みを行ったが、地域住民の参加は目標より少なかった。また、シンポジウムへの一般参加者も少数であった。地域住民に関心を持ってもらえるような広報の仕方、参加しやすい活動の計画など、検討していきたい。
5.「オンライン」の効果的活用
感染症の拡大状況にかかわらず、今後はWeb会議システムや各種の学習支援ツールを活用することは、切れ目のない日本語教育体制づくりに貢献すると考える。情報提供、意見交換が可能な場を作るためにも、これらを使いこなす知恵と方法を身に付けていかなくてはならない。

（6） その他参考資料

1. 2020年度_ぐんぐんチラシ_英語版
2. 2020年度ぐんぐんチラシ（第3セッション用）_英語版
3. 2020年度ぐんぐんチラシ_繁体字版
4. 2020年度ぐんぐんチラシ（第3セッション用）_繁体字版
5. 2020年度_ぐんぐんチラシ_簡体字版
6. 2020年度_ぐんぐんチラシ（第3セッション用）_簡体字版
7. 2020年度_ぐんぐんチラシ_日本語版
8. 2020年度_ぐんぐんチラシ（第3セッション用）_日本語版
9. 2020年度_わくわくチラシ_英語語版
10. 2020年度_わくわくチラシ_繁体字版
11. 2020年度_わくわくチラシ_簡体字版
12. 2020年度_わくわくチラシ_韓国語語版
13. 2020年度_わくわくチラシ_ネパール語版
14. 2020年度_わくわくチラシ_ベトナム語版
15. 2020年度_わくわくチラシ_ミャンマー語版
16. 2020年度_わくわくチラシ_日本語語版
17. 2020年度シンポジウムチラシ
18. 2020年度「多文化社会に携わるためのコミュニケーション講座」チラシ